

# 「李徴」の転生

——「人虎伝」との比較から見た「山月記」の近代性——

坂口三樹

はじめに

中島敦（一九〇九—一九四二）の「山月記」の材源が、中国唐代の小説「人虎伝」であることは、すでに周知のことといつてよい。それゆえ、「山月記」を論じるに際しては、「人虎伝」との比較を通じて「山月記」の主題や中島文学の特質の析出を行うのが一種の定石ともなっており、すでに多くの成果をあげている。こうした「山月記」研究の現在にあって、専家ならぬ身が、いまさら事新しく付け加えるべき余地はほとんどないように見える。

しかし、従来の考察では、中島が材源をどのように改変・創作したかを論ずることに急なあまり、「人虎伝」そのものの分析は等閑に付されてきたか、極めておざなりにすまされてきたというのが実情に近い。むろん、「人虎伝」は題材に過ぎないから、従来の研究が「山月記」の改変部の

意義や独創性の解明にのみ腐心してきたのも無理からぬことではある。がしかし、「人虎伝」の分析をも踏まえて比較考察を行うならば、これまで闡明されていなかった「山月記」の一面が、陽画に対する陰画のごとく浮かび上がる可能性もあるのではないか。

そこで、本稿では、「人虎伝」の分析を踏まえ、中国学の視座から「山月記」を照射することで、これまで見落とされていた「山月記」の側面にも光を当ててみたい。

ところで、「山月記」が「人虎伝」のどこをどう改変・付加・削除したかについては、すでに諸家によつて大小さまざまな点が指摘されているが、今、小説の主題や構造に直接関わる大きな相違点に限るならば、次の四点が挙げられよう。

甲、冒頭部における李徴の人物設定

乙、虎と化してからの行動

丙、袁修への依頼の順序

丁、虎と化した原因

さらにこの四点は、甲・丙の李徴の人物造型に関わる相違点（Ⅰ）と、乙・丁の前近代の小説と近代の小説との性格の違いに由来する相違点（Ⅱ）とに集約し得る。むしろ、この二つは異なる性格のものではなく、相互に有機的に関連するものであるが、今は便宜上、この二つの観点に分けて、両者の相違点について概観することとする。

なお、作品の引用に当たっては、「人虎伝」には塩谷温『晋唐小説』（国訳漢文大成・文学部第十二巻、国民文庫刊行会、一九二〇）所収の本文を用い、適宜句読点を改め会話に力ギ括弧を施すとともに、清・嘉慶十一年（一八〇二）弁山楼刻本影印『唐代叢書』（新興書局、一九七二）の異文を（一）に入れて示した。また、「山月記」には『中島敦全集』<sup>1</sup>（筑摩書房、二〇〇二）を用いたが、校訂者の補ったルビはすべて省略した。

### 一、「人虎伝」と「山月記」の相違点Ⅰ

#### ——李徴の人物造型

まず、Ⅰの相違点のうち、甲について「人虎伝」と「山月記」の当該部分を掲げ、改変の様相を確認することから始めよう。

甲、冒頭部における李徴の人物設定

「人虎伝」

隴西李徴、皇族子。家於〔于〕號略。徴少博學、善屬文。弱冠從州府貢焉。時號名士。天寶十五載春、於尚書右丞楊元榜下、登進士第。後數年、調補江南尉。徵性疎逸、恃才倨傲。不能屈跡卑僚、嘗鬱鬱不樂、每同舍會既酣、顧謂其群官曰、「生乃與君等爲伍耶〔邪〕。」其僚友咸側目之。及謝秩、則退歸間適、不與人通者、近歲餘。後迫衣食、乃東遊吳楚間、以干郡國長吏。

隴西の李徴は、皇族の子なり。號略に家す。徴少くして博學、善く文を屬す。弱冠にして州府の貢に従ふ。時に名士と号せらる。天寶十五載の春、尚書右丞楊元の榜下に於いて、進士の第に登る。後數年、江南の尉に調補せらる。徵性疎逸、才を恃みて倨傲なり。跡を卑僚に屈する能はず、嘗に鬱鬱として樂せず、同舍の会の既に酣なる毎に、顧みて其の群官に謂ひて曰はく、「生は乃ち君等と伍を為さんや。」と。其の僚友咸之を側目す。謝秩に及べば、則ち退き歸りて間適し、人と通ぜざる者、歲余に近し。後衣食に迫られ、乃ち東のかた吳楚の間に遊び、以て郡國の長吏に干む。

「山月記」

隴西ろうせいの李徴は博學才穎たかひ、天寶の末年、若くして名を虎榜こぼうに連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に歸臥し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗惡な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺さうとしたのである。

しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁に驅られて來た。

「山月記」では、「ひたすら詩作に耽つた。」「詩家としての名を死後百年に遺さうとしたのである。」とあるように、李徴の詩人としての側面が強調されているが、「人虎伝」の主人公にそのような性格は付与されていない。「善鬪文」との記述は見えるものの、それは進士に應ずる者ならば当然備えていべき資質をいつたまでであつて、「山月記」ほどには詩人たることに執着を見せていない。こうした改變について、木村一信は「物語に詩人という存在を設定する必然性には、中島の『願望』とも言うべき決意がある。」と指摘する。

次に、丙の箇所について見る。

丙、袁修への依頼の順序

「人虎伝」

乃曰、「吾於人世且無資業。有子尙稚、固難自謀。君位列周行、素秉風義。昔日之分、豈他人能石哉。必望念其孤弱。時賑卹之〔其乏〕、無使殍死於道途、亦恩之大者。」言已又悲泣。修亦泣曰、「修與足下休戚同焉。然則足下子亦修子也。當力逼〔副〕厚命。又何虞其不至哉。」虎曰、「我有舊文數十篇、未行於代。雖有遺藁、當盡散落。君爲我傳錄。誠不能列文人之口〔戸〕闕、然亦貴傳於子孫也。」修即呼僕命筆、隨其口書。近二十章。文甚高、理甚遠。閱而歎者、至於再三。虎曰、「此吾平生之業也。又安得寢而不傳歟。」既又曰、「吾欲爲詩一篇。蓋欲表吾外雖異、而中無所異。亦欲以道吾懷而攄吾憤也。」修復命吏以筆授之。詩曰、……

乃ち曰はく、「吾人世に於いて且つ資業無し。子有るも尚ほ稚く、固より自ら謀り難し。君は位周行に列し、素より風義を乗る。昔日の分、豈に他人能く右らんや。必ず其の孤弱を念ふを望む。時に之を賑卹し〔其の乏しきを賑ひ〕、道途に殍死せしむる無くんば、亦た恩の大なる者なり。」と。言ひ已はりて又悲泣す。修も亦た泣きて曰はく、「修と足下とは休戚同じ。然

らば則ち足下の子は亦た惨の子なり。当に力めて厚命に逼る〔副ふ〕べし。又何ぞ其の至らざるを慮れんや。」と。虎曰はく、「我に旧文數十篇有り、未だ代に行はれず。遺稿有り」と雖も、当に尽く散落すべし。君我が爲に伝録せよ。誠に文人の口〔戸〕闕に列する能はざるも、然れども亦た子孫に伝ふるを費ぶなり。」と。惨即ち僕を呼びて筆を命じ、其の口に隨ひて書せしむ。二十章に近し。文甚だ高く、理甚だ遠し。閱して歎ずる者、再三に至る。虎曰はく、「此れ吾が平生の業なり。又安くんぞ寝めて伝へざるを得んや。」と。既にして又曰はく、「吾詩一篇を爲らんと欲す。蓋し吾が外異なり」と雖も、而も中は異なる所無きを表さんと欲すればなり。亦た以て吾が懐ひを道ひて、吾が憤りを據べんと欲するなり。」と。惨復た吏に命じて筆を以て之に授けしむ。詩に曰はく、……

### 「山月記」

所で、さうだ。己がすっかり人間でなくなつて了ふ前に、一つ頼んで置き度いことがある。

袁慘はじめ一行は、息をのんで、叢中の聲の語る不思議に聞入つてゐた。声は續けて言ふ。

他でもない。自分は元來詩人として名を成す積りで

ゐた。しかも、業未だ成らざるに、この運命に立至つた。曾て作る所の詩數百篇、固より、まだ世に行はれてをらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなつてゐよう。所で、その中、今も尙記誦せるものが數十ある。之を我が爲に傳録して戴き度いのだ。何も、之に仍つて一人前の詩人面をしたのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執着した所のものを、一部なりとも後代に傳へないで、死んでも死に切れないのだ。

袁慘は部下に命じ、筆を執つて叢中の聲に隨つて書きとらせた。李徹の聲は叢の中から朗々と響いた。長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一讀して作者の才の非凡を思はせるものばかりである。しかし、袁慘は感嘆しながらも漠然と次の様に感じてゐた。成程、作者の素質が第一流に屬するものであることは疑ひない。しかし、この儘では、第一流の作品となるのは、何處か（非常に微妙な點に於て）缺ける所があるのではないか、と。

舊詩を吐き終つた李徹の聲は、突然調子を變へ、自らを嘲るが如くに言つた。

差しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成

り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれてゐる様を、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たはつて見る夢にだよ。嗤つて呉れ。詩人に成りそこなつて虎に成つた哀れな男を。(袁修は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いてゐた。) さうだ。お笑ひ草ついでに、今の懐を即席の詩に述べて見ようか。この虎の中に、まだ、曾ての李徴が生きてゐるし、しに。

袁修は又下吏に命じて之を書きとらせた。その詩に言ふ。

……

最早、別れを告げねばならぬ。酔はねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が) 近づいたから、と、李徴の聲が言つた。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼等は未だ號略にゐる。固より、己の運命に就いては知る筈がない。君が南から歸つたら、己は既に死んだと彼等に告げて貰へないだらうか。決して今日のことだけは明かさないうで欲しい。厚かましいお願だが、彼等の孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないやうに計らつて戴けるならば、自分にとつて、恩倖、之に過ぎたるは莫

い。

言終つて、叢中から慟哭の聲が聞えた。袁も亦涙を泛べ、欣んで李徴の意に副ひ度い旨を答へた。李徴の聲は併し忽ち又先刻の自嘲的な調子に戻つて、言つた。本當は、先づ、此の事の方を先にお願ひすべきだつたのだ、己が人間だつたなら。飢ゑ凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を氣にかけてゐる様な男だから、こんな獸に身を墮すのだ。

聊か長い引用となつたが、この部分の「山月記」の改変は、李徴の詩業への執着ぶりを形象化したものとして注目に値する。すでに濱川勝彦も指摘するように、「この順序の入れ替えは、李徴のおそろしいまでの執念を強調する為のものであつた」に違いない。

しかも、「山月記」のこの部分は、ほとんどが極めて屈折した李徴の独白で占められている。そこでは、時に自嘲を交えつつ、執拗なまでの自己分析が試みられるのである。ここに、「人虎伝」と「山月記」との小説としての性格の違いが浮かび上がる。次に、その点について確認しよう。

## 二、「人虎伝」と「山月記」の相違点Ⅱ

——小説としての性格の相違

まず、乙の部分について比較する。

乙、虎と化してからの行動

「人虎伝」

及視其肱髀、則有〔班〕毛生焉。心甚異之。既而臨溪照影、已成虎矣。悲慟良久。然尚不忍攫〔攫〕生物食也。既久飢不可忍、遂取山中鹿豕獐兔充食。又久諸獸皆遠避無所得、飢益甚。一日有婦人從山下過。時正餒迫、徘徊數四、不能自禁、遂取而食。殊覺甘美。今其首飾、猶在巖石之下也。自是見兔而乘者・徒而行者・負而趨者・翼而翔者・毳而馳者、力之所及、悉擒而阻〔阻〕之立盡、率以爲常。

其の肱髀を視るに及びては、則ち〔班〕毛の生ずる有り。心に甚だ之を異しむ。既にして溪に臨みて影を照らせば、已に虎と成れり。悲慟すること良久し。然れども尚ほ生物を攫み〔攫り〕て食らふに忍びざるなり。既に久しくして飢ゑて忍ぶべからざれば、遂に山中の鹿豕獐兔を取りて食に充つ。又久しくして諸獸皆遠く避けて得る所無く、飢ゑ益々甚だし。一日婦人の山下より過ぐる有り。時に正に餓ゑ迫り、徘徊すること數四、自ら禁ずる能はず、遂に取りて食らふ。殊に甘美なるを覺ゆ。今其の首飾、猶ほ巖石の下に在るなり。是れより冕して乗る者・徒して行く者・負ひて趨

る者・翼ありて翔る者・毳ありて馳する者を見れば、力の及ぶ所、悉く擒へて之を阻み〔阻らひ〕て立ちどころに尽くすを、率ね以て常と爲す。

「山月記」

氣が付くと、手先や肱のあたりに毛を生じてゐるらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となつてゐた。自分は初め眼を信じなかつた。次に、之は夢に違ひないと考へた。夢の中で、之は夢だぞと知つてゐるやうな夢を、自分はそれ迄に見たことがあつたから。どうしても夢でないと思つて懼れなかつた時、自分は茫然とした。さうして懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思つて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になつたのだらう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。自分は直ぐに死を想うた。しかし、其の時、眼の前を一匹の兔が駆け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目覺ました時、自分の口は兔の血に塗れ、あたりに兔の毛が散らばつてゐた。之が虎としての最初の経験であつた。それ

以來今迄にどんな所行をし續けて來たか、それは到底語るに忍びない。

「人虎伝」が、飢えに迫られて人間を襲つて食うに至るまでの状況を事細かに叙しているのに対し、「山月記」では眼前を駈け過ぎた兎を襲つたことを述べるに止め、「それ以來今迄にどんな所行をし續けて來たか、それは到底語るに忍びない。」と、その後の行動を伏せて語らないのは、兩者の小説としての性格の違いを端的に物語るものである。「人虎伝」は、凄慘・猟奇的な描写を交えて読者の興味を刺激しつつ、人が虎に化すという怪異な出来事を語るうとするのであるが、「山月記」の関心はそのようなところにはなく、専ら虎となつた李徴の内的苦悩に焦点が当てられている。山敷和男はこれを、残酷を残酷として容赦なく描く「野生的リアリズム」（芥川龍之介）の「人虎伝」と、「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」の所有者である近代人を造型した「山月記」との人間觀の相違として把握する。<sup>5)</sup>

では、丁の部分はどうかであるうか。

丁、虎と化した原因

「人虎伝」

慘覽之驚曰、「君之才行、我知之（久）矣。而君至於此者、君平生得無有自恨乎。」虎曰、「二儀造物、固

無親疎厚薄之間。若其所遇之時、所遭之數、吾又不知也。噫、顔子之不幸、冉有斯疾、尼父常深歎之矣。若反求其所自恨、則吾亦有之矣。不知定因此乎。吾遇故人、則無所自匿也。吾常記之。於南陽郊外、嘗私一孀婦。其家竊知之、常有害我心。孀婦由是不得再合。吾因乘風縱火、一家數人盡焚殺之而去。此爲恨爾。」

慘之を覽て驚きて曰はく、「君の才行、我之を知れり（ること久し）。而も君此に至れるは、君平生自ら恨むこと有る無きを得んや。」と。虎曰はく、「二儀の物を造るや、固より親疎厚薄の間無からん。其の遇ふ所の時、遭ふ所の數の（こと）きは、我又知らざるなり。噫、顔子の不幸、冉に斯の疾有り、尼父常て深く之を歎ぜり。若し其の自ら恨む所を反求せば、則ち吾亦た之れ有り。定めて此に因るを知らざらんや。吾故人に遇へば、則ち自ら匿す所無きなり。吾常に之を記す。南陽の郊外に於いて嘗て一孀婦に私す。其の家竊かに之を知り、常に我を害する心有り。孀婦は是に由りて再び合ふを得ず。吾因りて風に乘じて火を縱ち、一家數人尽く之を焚殺して去る。此を恨みと爲すのみ。」と。

「山月記」

何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つた

が、しかし、考へやうに依れば、思ひ當ることが全然ないでもない。人間であつた時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといつた。實は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかつた。勿論、曾ての郷黨の鬼才といはれた自分に、自尊心が無かつたとは云はない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいふべきものであつた。己は詩によつて名を成さうと思ひながら、進んで師に就いたり求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所爲である。己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢て刻苦して磨かうともせず、又、己の珠なるべきを半ば僭するが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた。己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせる結果になつた。人間は誰でも猛獸使であり、その猛獸に當るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獸だつた。虎だつたのだ。之が己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさ

はしいものに變へて了つたのだ。

「人虎伝」が、虎と化した原因を、密通していた寡婦との逢瀬を邪魔だてされた腹いせに、火を放つてその家族全員を焼き殺した悪行に求め、因果応報の考えによつて説明しているのに対し、「山月記」は、それを自己の性情、すなわち「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」の所爲であると分析する。山崎一穎のいうごとく、「人虎伝」が李徴の因果応報伝として扱っているのに、『山月記』はそれを心の問題に還元している」のである。これについて、岸達志は「極言すればこの虎の応答が、唐代傳奇小説人虎伝を、近代小説山月記として点晴させると云うべきなのである。」と述べる。<sup>(7)</sup>

### 三、「人虎伝」における依頼の順序が示すもの

丙の改変が、「山月記」にとつていかなる意味を持つていたかについてはすでに瞥見したが、ここに今あらためて

問題にしたいのは、ではなぜ「人虎伝」では妻子の生活の援助が優先され、詩の伝録が後になっているのかという点である。「人虎伝」の李徴が、「山月記」のように詩人として造型されているわけではないことからすれば、それは当然のことかも知れない。しかし、「山月記」ほどではないにしろ、「此吾平生之業也、又安得寝而不傳歟。」の言もあり、それなりの執着は見せているのである。とすれば、「人虎伝」の依頼の順序は、いったいいかなる価値観に基づいて選択されたものなのであろうか。これについて、佐々木充は「これは確かに人間的な態度だと云つてもいい。しかしやはり余りにも常識的にすぎるのである。」と述べるが、その「常識」とは果たして我々が考える常識と同じなのであろうか。私見によれば、この問題を解くカギは、「有子尙稚」の理解、就中「有子」の解釈にあるように思われる。ここにいう「有子尙稚」の「子」とは、恐らく男女のいずれをも含む子ども一般を指すのではあるまい。そのことは、次のような例によつても裏付けられる。

天授三年、清河張鑑、因官家於衡州。性簡靜、寡知友。  
無子、有女二人。(唐・陳玄祐「離魂記」)

天授三年、清河の張鑑、官に因りて衡州に家す。性簡靜にして、知友寡なし。子無く、女二人有り。

娘二人がいるのに「無子」といつているのは、この「子」が男子、それも跡継ぎとなる男の子を指しているからである。また、三国・呉の虞翻「與弟書(弟に与ふる書)」には、

有數頭男、皆如奴僕。伯安雖癡、諸兒不及。觀我所生、有兒無子。(清・嚴可均「全三国文」卷六十八)

諸兒及ばず。我が所生を觀るに、兒有るも子無し。ここでは、數人の男子がいるにも関わらず、「無子」といつているのであるから、それが単なる男子というだけでなく、跡継ぎとなるべき男子との限定された意味で用いられていることは、ほぼ疑いを容れない。

以上の用例に徴すれば、「人虎伝」の「有子尙稚」の「子」も、家の跡継ぎとしての男子と見て不可はない。そして、儒教倫理が人々の思考や価値観を規定していた前近代の中国社会にあつて、男子が家の世継ぎとしていかに重視されていたかは、様々な文献からも裏付けることができる。例えば、東晋の陶淵明「命子(子に命く)」には、次のこと

三千之罪 三千の罪

無後爲急　後無きを急と爲す

句は、『孝経』五刑章に見える「五刑之屬三千、而罪莫大于不孝。(五刑の属三千、而して罪は不孝より大なるは莫し。)」と、『孟子』離婁上に「不孝有三、無後爲大。(不孝に三有り、後無きを大なりと爲す。)」とあるのを踏まえたもので、『孟子』の当該部分に付された趙岐注に「不娶無子、絶先祖祀、三不孝也。(娶らずして子無く、先祖の祀を絶つは、三の不孝なり。)」とあるのを参考によれば、「もろもろの罪の中でも、世継ぎがなく祖先の祭祀を絶やす不孝こそ最大のものだ。」との意味となる。

また、唐の杜甫「兵車行」に見える次の例も、こうした男子重視の価値観から発想された句としてよく知られている。

信知生男惡

信に知る　男を生むは悪しく

反是生女好

反つて是れ女を生むは好きを

生女猶得嫁比鄰

女を生まば猶ほ比隣に嫁するを得

るも

生男埋沒隨百草

男を生まば埋没して百草に随はん

この句は、「戦場で朽ち果てる運命の男子よりも、近所に嫁にやれる女子を生んだほうがまだましだ。」と述べることで、苛酷な徴兵を強いる政治のありようを激しく指弾

したものであるが、それが政治批判の表現として機能するために、男子を世継ぎとして重視する心性が社会に確固として存在していることが前提であった。そして、かかる男子重視の社会通念を逆転させることで政治の現状を批判する表現は、つとに三国・魏の陳琳<sup>9)</sup>「飲馬長城窟行」や、晋の楊泉「物理論」(北魏・酈道元「水経注」卷三「河水三」所引)が引く秦の民歌にも見えており、すでに長い伝統を持っていた。それは逆に、世継ぎたる男子重視の心性が、連綿として人々の価値観を支配してきたことの証左でもあるだろう。<sup>11)</sup>

このように見てくれば、「人虎伝」の李徴が「有子尙稚、固難自謀。」といい、「必望念其孤弱。云々」と述べて、我が子の後見を哀憐に依頼しているのも、世継ぎである息子の夭折によって祖先の祭祀を絶やす事態になることを畏れることではなかったか。このように考えるならば、「人虎伝」の李徴が、詩の伝録よりもまず妻子の生活の援助を依頼しているのも、当時の心性に照らして考えるならば、極めて当然のことなのであった。

ところで、右のように家の継統を重視する心性が強固に人々の価値観を支配していた前近代の中国の社会にあって、いくら己の詩業に対する強い執着があったとはいえ、「山

月記」の李徴のごとく、詩の伝録を家の存続よりも優先させるような発想が、果たして可能であったのか。換言すれば、当時の士大夫たちにとって、家の存続と詩の伝録とは、二者択一で処理し得るような同一レヴェルの問題として把握され得たのか。次に、その点について検討しよう。

#### 四、詩と家と

詩、すなわち文学と家との関係を考える上で、次の『梁書』王筠伝の記述は、極めて示唆的である。

又與諸兒書論家世集云、「……非有七葉之中、名德重光、爵位相繼、人人有集、如吾門世者也。沈少傳約語人云、『吾少好百家之言、身爲四代之史、自開關已來、未有爵位蟬聯、文才相繼、如王氏之盛者也。』……」（『梁書』卷三十三、王筠伝）

又諸兒に与ふる書に家世の集を論じて云はく、「……七葉の中、名德光を重ね、爵位相繼ぎ、人人に集有ること、吾が門世の如き者有るに非ざるなり。沈少傳約人に語げて云はく、『吾少くして百家の言を好み、身ら四代の史を爲るも、開關より已來、未だ爵位蟬聯として、文才相繼ぐこと、王氏の盛んなるが如き者有らざるなり。』と。……」と。

これは、代々「文」集のあることが、「名德」や「爵位」とならんで家門の声望を高める要素として重視されていたことを物語っている。六朝という時代にあつては、文集の存在は、個人の詩人としての評価に止まらず、家の評価に重要な影響を与えるものであつた。

また、これとは意味が多少異なるものの、杜甫「宗武生日（宗武の生日）」の次の句も、詩を家との関連で捉えた発言として興味深い。

詩是吾家事 詩は是れ吾が家の事

人傳世上情 人は伝ふ 世上の情

「詩是吾家事」とは、恐らく祖父の杜審言以来の詩人の家としての伝統をいっただものである。ここにも、詩は個人が存在を越えて、受け継ぐべき家の伝統として意識されていたことが窺えよう。

以上のように、詩が個人の評価のみに止まらず、家門の声望や評価にまで影響するものであつたとすれば、「人虎伝」において李徴が詩の伝録を依頼する際にいった、「誠不能列文人之口闕、然亦貴傳於子孫也。」との言も、単なる謙辞とのみ解するのでは不十分なのではあるまいか。それは、李徴という人間がこの世に存在したことの証明であるばかりでなく——むろんそれが第一義ではあつたにして

も——、自分の家門に対する評価への配慮をも含んでいたと見なせよう。当時の士大夫の価値観に照らしてみれば、家の存続こそは何物にもまして優先すべき重要な使命なのであって、詩もまたそれとは無縁ではありえなかつた。とすれば、詩の伝録を妻子の生活の援助よりも優先させるという、「山月記」の李徴のごとき発想が成り立つことは、実際にはかなり困難であつたといわざるを得ない。

### むすび

「山月記」の主題を、存在の不条理性・芸術にとりつかれた人間の苦惱・「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」という性格の悲劇の三点に認め、「おのれの尊大な自我故に虎と化し、理不尽な生を生きねばならぬ男の悲劇を通して芸術に執する者の苦惱を描いたもの」と結論づけたのは、鷺只雄である。そのこと自体に異論を称えるつもりはない。ただ、本稿で確認しなかったのは、右のような主題（近代的自我）の表出が、いかにして「山月記」において可能になつたかという問題である。換言すれば、それは主題を支えるプロットが、いかなる心性を基盤に発想されているかという問題でもある。材源の「人虎伝」との比較を通じてみた場合、「山月記」には、特に袁修への依頼の順序におい

て著しい発想の相違が認められた。すなわち、「人虎伝」の李徴には、明らかに儒教倫理に基づく前近代的心性が刻印されていたのに対し、「山月記」の李徴にはそのような心性とは異なる近代的価値観の反映が認められた。中島敦は、詩（文学）にとりつかれた男の妄執を形象化するために、妻子の生活の援助と詩の伝録の順序を入れ替えたのであつたらう。しかし、ことはそれだけに止まらなかつた。作者がそのことにどれだけ自覚的であつたかはともかく、この改変によつて、李徴は近代知識人の内面を演出するに足る人物になりおさせたのだといえよう。これをもつて、李徴は中国中世の士大夫から近代人へと転生したのだ、などと揚言したら、彼の泉下の人に何たる賢しらと冷笑を受けるであらうか。

### 注

(1) 李徴が虎になる話としては、次の三つのテキストの存在が知られている。

①北宋・李昉等撰『太平広記』巻四二七「虎二」所収「李徴」  
(晩唐・張誥『宣室志』)

②明・陸楫編『古今說海』説淵部・別伝家・壬集所収「人虎伝」(作者欠名)

③清・陳世熙輯『唐人說薈(唐代叢書)』巻二十所収「人虎伝」

(中唐・李景亮)

このうち、中島敦が依拠したのは、③の『唐人説書』本であることは明らかである。なぜなら、②は、内容的には③と同一であるが、登場人物の名前が「李微」と「李儼」になっている点異なるし、一方、①は最後に虎の姿を見せる場面がないなど、③に比して内容が簡略であるばかりでなく、「山月記」の題名の由来と考えられる次の七律も載せていないからである。

偶因狂疾成異類、災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵、當時聲跡共相高

我爲異物逢茅下、君已乘軺氣勢豪

此夕溪山對明月、不成長嘯似成嘯

なお、中島が拠つた『唐人説書』本「人虎伝」は、塩谷温『晋

唐小説』(國訳漢文大成・文学部第十二卷、国民文庫刊行会、

一九二〇)所収のものであつたと推測されている。

(2)「山月記」と「人虎伝」との比較考察を中心とした

論考としては、岸達志「『山月記』の比較文学的考察」

『近代文学攷』創刊号、一九五三)、高田瑞穂「中島

敦鑑賞―名篇の新しい評釈 山月記」(一)〜(四)

『国文学』一・二・三・四月号(第五卷第一・三・四・五号)、

一九五九・六〇)、山敷和男「人虎伝」と「山月記」(『漢

文学研究』第八号、一九六〇)、山崎一穎「『山月記』論」

『文芸と批評』第八号、一九六五)、佐々木充「中島敦「山

月記」―材源について―」(『国文学』五月号(第十一卷五

号)、一九六六)などがある。また、濱川勝彦「山月記」論―律背反と逆説の世界―(『国語国文』第四十卷八号、一九七二)、木村一信「山月記」論―〈滅び〉への恐れ―(『日本文学』第二十四卷第四号、一九七五)などにも両者を比較しての考察が見られる。

(3) 木村一信、注(2) 前掲論文。

(4) 濱川勝彦、注(2) 前掲論文。

(5) 山敷和男、注(2) 前掲論文。

(6) 山崎一穎、注(2) 前掲論文。

(7) 岸達志、注(2) 前掲論文。

(8) 佐々木充、注(2) 前掲論文。

(9) 陳琳「飲馬長城窟行」に「生男慎莫舉、生女哺用脯、君獨不見長城下、死人骸骨相撐拄」とある。

(10) 鄭道元『水経注』卷三「河水三」所引の楊泉『物理論』に「秦始皇使蒙恬築長城、死者相屬。民歌曰、生男慎勿舉、生女哺用脯、不見長城下、尸骸相支柱。其冤痛如此矣。」とある。

(11) さらに付け加えるならば、杜甫「無家別」の結句「人生無家別、何以爲蒸黎」も、かかる価値観を背景とするがゆえに、民衆の置かれた救いようのない悲惨な現実を告発する厳しい政治批判の言辞となり得たのであろう。

(12) 鷺只雄「中島敦の『古譚』について」(『言語と文芸』第五十号、一九六七)。

(聖徳大学短期大学部)